



もう一度、会いたい

庭づくりと創作活動で 人生を楽しむ

桑迫賢太郎さん



か つて雪浦で自給自足の生
活を目指しながら絵を描
いて生活していた桑迫賢太郎さ
んに会うため、雲仙市へと足を
運んだ。柔らかな佇まいが十四
年前とあまりにも変わらなくて、
一瞬にして心の距離が縮まった
ような気がした。

桑迫さんは、妻の里枝さんの
出身地である島原半島へ九年前
に移住し、今は庭仕事と創作を
中心とした暮らしをしていると
いう。さっそく自宅の奥に案内
してもらうと、そこには公園と
呼んだ方がふさわしい規模の庭
が広がっていた。しかも、数え
きれないほどの植物が自由奔放
に伸び、色とりどりの花々が、
まるでこの世界を謳歌している
ように咲き誇っている。

「僕たちがこの家に引っ越し
てきたのは九年前の春でした。
その前の冬に、ここに住んでい
らっしゃった大家さんのお母様
が亡くなり、空き家になつてい
たんです。当時、この庭はよく
手入れされた畑で、僕たちが來
た時も、キャベツや玉ねぎ、空
豆などがなついて、とても大
切にされていたことが分かりま
した。この土地を畑として受け
継ぐ選択肢もあつたかもしぬま
よになりました」。

せんが、雪浦で畑仕事をしてい
た際、なかなか収穫に結びつか
ず、農業に対する劣等感を抱い
ていた僕は、この広い土地で野
菜を栽培する自信がありません
でした。しかし夏になり、どん
どん荒れていく畑を見るにつけ
胸が痛み、少しずつ手を入れる
ようになります。

庭に出るうちに、桑迫さんは
あることに気付いた。それは、
庭仕事は収穫を問われない、と
いうことだ。思い返せば、雪浦
時代も農作業は好きだった。植
物と関わること自体は好きなな
だ。「畑より、庭の方が自分に
は向いている」。それは大きな
発見だった。

里枝さんが手作りのおはぎでもてなしてくれた。
温かな気遣いが嬉しい。



No.6



野菜を干したり、春に向けての苗を準備をしたり…
敷地内のいたるところで、桑迫さんご夫妻の豊かな暮らしが垣間見える。



庭をモチーフにした抽象画。
柔らかな色づかいが桑迫さんらしい。



ラシバという名前で、水路に植わっていたのを持って帰つて植えました。聞いていると、桑迫さんは雑草という概念がないようだ。生命のすべてが愛おしいのだろう。小さな花に触れながら「ありがとうございます」と、咲いてくれたことへの感謝の気持ちをつぶやいている。「植物の良さは、勝手に生きていってくれるところ」だと言うが、充分過ぎるほどの愛情は伝わっているのだと思う。そうであれば、彼らがこんなにも嬉しそうに咲くはずはない。



毎年、書下ろしのみで制作するカレンダー



庭 づくりは描く絵にも影響を与えていた。「植物の絵を描くようになったのは、大きな変化ですね」。ギヤラリーにはバラやミモザ、スイセシンや夾竹桃などの素描のほか、庭をイメージして描かれた抽象画も飾られている。どれも桑迫さんらしい優しい色づかいで、心温まる穏やかな世界が広がっている。

づくりと絵を描くことには、共通点もあるようだ。「僕は草取りが好きなんです。ちょっと混みあっているところの草を間引くだけで風が通り、バランスが良くなります。庭も絵もバランスをとるという点が同じで、僕はそれがとても好きなのだと思います」。

アトリエまで花を持ち帰り、描くこともある。「植物は同じ科名のものだと似ているため、描くのが難しいと感じることもあります。僕は絵が上手くないんで(笑)、どうしたらその植物の特徴を色や線で抽出できるか、エッセンスをどう汲み取ればいいのか…そうしたことを考えながら手を動かしています」。

雪浦で農作業をしていた頃は、忙しそうにしていた桑迫さんだが、ここではのんびりとした時

もう一度、会いたい

桑迫 賢太郎

さん

科名のものだと似ているため、描くのが難しいと感じることもあります。僕は絵が上手くないんで(笑)、どうしたらその植物の特徴を色や線で抽出できるか、エッセンスをどう汲み取ればいいのか…そうしたことを考えながら手を動かしています」。

雪浦で農作業をしていた頃は、忙しそうにしていた桑迫さんだが、ここではのんびりとした時



植物をモチーフにした素描。
桑迫さんの目や手を通して、
バラ(左)やミモザ(右)は、ま
た違った印象を与える。



acacia baileyana
Kentaro
22 Mar. '24